

関連性理論から見た終助詞「よ」「ね」の機能

大 浜 るい子

(1996年9月9日受理)

Die Funktionen von japanischen Endpartikeln "yo" und "ne" - im Rahmen von Relevanz Theorie -

Ruiko Ohama

In diesem Papier wird diskutiert, wie japanische Endpartikeln "yo" und "ne" funktionieren. Diese Partikeln sind im mündlichen Gespräch sehr wichtige Wörter. Ohne diese Wörter klingt es nicht nur unnatürlich, sondern es ist auch manchmal ungrammatisch. In diesem Sinne müssen diese Partikeln von ausländischen Japanischlernenden unbedingt beherrscht werden. Aber in Wirklichkeit scheint es ziemlich schwer zu sein. Das kommt erstens, meine ich, von der Tatsache, daß wir uns als Lehrer über die Funktionen dieser Partikeln nicht immer einigen können. Wir haben hier die bisherigen Forschungsarbeiten über dieses Thema untersucht und haben gefunden, daß ihr Theorierahmen nicht geeignet ist, in dem die Analysen von den Äußerungen nicht loskommen können. Die vorliegende Arbeit ist ein Versuch, diese Partikeln im Rahmen der Relevanz - Theorie von Sperber / Wilson zu erklären. Die Bedeutung von "yo" und "ne", die wir hier vorschlagen, ist folgende. Diese Partikeln zeigen die Eigenschaften von Kontextannahmen, die von getroffendem Äußerungssatz geleitet werden sollen, d.h. Gegensätzlichkeit (im Fall von "yo") oder Parallelität (im Fall von "ne").

1 はじめに

終助詞の中でも「よ」と「ね」は「か」と共に、日本語を学ぶ外国人にはどうしても学んでほしい重要なものという認識がなされている^{注1}。一見何でもないような語だが、母語話者による会話ではとにかく使用頻度が高く、それがなくては自然な会話になりにくいからである。「か」が比較的容易に習得されるのに対し、「よ」と「ね」は難しく、中でも「よ」はなかなかうまく使いこなせないと言われる。これは単に、学習者の母語に類似のものがいないために起こる言語使用上の問題ではなく、むしろ文法上の記述が不十分なために学習者が混乱しているのではないだろうか。というのも、この終助詞の機能に関しては、そもそも研究者達の間でさえ共通の理解が得られているとは言えないからである。

終助詞の問題に限らないが、こうした個別的言語形式の解明は時代の言語理論に大きく影響を受ける。「よ

と「ね」に関するこれまでの議論を見ると、考察の対象が文から発話へ拡大し、さらに発話連鎖が視野に入ってきて、言語学の発展と共に考察が深まっていくのが分かる。しかし、そこから得られた知見ははまだ教室現場に提供できるほどに明快なものにはなっていない。一体どこに問題があるのだろうか。これまでの研究を見ると、確かに対象が拡大され、より実際の行為の中でとらえられながら、考察自体は常に言語形式に密着していたとは言えないだろうか。それは、言語形式が直接的にしる間接的にしるあることを意味し、それを聞き手に理解させることが伝達行為であると考えられてきたからである。ところがここに、これとは全く違った考え方が登場してきた。「伝達とは理解させることではなく、認知環境を変えることであり、言語形式はそのための単なるヒントであり、手がかりにすぎない」というスペルベル/ウイelsonの「関連性理論」である。会話の場面で目に見えるのは発話形式である。分析者の目もそれにとらわれすぎてはいなかつ

ただろうか。会話者達にとって目に見えないものこそがより重要であるというスペルベル／ウイルソンの観察は、分析に新たな視点を提供するはずである。以下は、この理論枠を用いて文末の「よ」と「ね」の機能を明らかにする試みである。

2 先行研究

「よ」と「ね」に関するこれまでの研究を概観しておこう。大きく分けて三つのタイプが区別できる。ひとつは伝達される情報の性格の違いとして、もう一つは伝達機能上の違いとして、最後のひとつは手続き意味論という枠内で説明されるものである。以下、それぞれの考え方を簡単にまとめ、その問題点を指摘したい。

2-1

まず最初に取り上げるのは、伝達される情報が話し手と聞き手のうちどちらの縄張りに属するか、あるいは縄張りというのが強すぎるとすれば、聞き手がその情報を知っているか知らないかということで区別するというものである。(1)(2)が示すように、聞き手の縄張りに属する情報には「ね」がつき、話し手の縄張りのものには「よ」がつくというのは多くの例に当てはまる。

- (1) 奥様は中野にお住まいだったんですね
- (2) 私、来年50になるんですね

ところが、(1)と(2)の「ね」と「よ」をそれぞれ入れ換えても、決して不自然ではない状況というのもまた思いつづることができる。

- (3) 奥様は中野にお住まいだったんですよ
- (4) 私、来年50になるんですよ

少し物忘れがひどくなった奥様を相手に喋っているとか、1才年上の相手が今年50になると言ったのを聞いてあらためて自分の年を考えたとすれば、ごく自然な発話である。このような例を説明するためには、縄張りというのは少々強すぎ、むしろその情報を聞き手が知っているか知らないかで区別する方がいいと考える研究者達が多い。また「寒くなりましたね」や「もう6時ですよ」という時の気候や時間についての情報などのことも考え合わせると、縄張りというよりも、聞き手が知っている知らないという方が適当であろう。しかしこれにも少なくとも次のような問題点がある。

1) 聞き手が知らない情報にはつかないはずの「ね」が、つく場合がある。例えば時間を尋ねられて、「そろ

そろ6時ですね」と答えることができる。これをどのように説明するか。

2) 白川(1992)や金水(1993)が指摘するように、「よね」という助詞が「よ」と「ね」の結合したものであると考えると、「聞き手が知らない情報」と「聞き手が知っている情報」という対立的な説明では「よね」において破綻してしまう。

3) さらに重要なことは、そもそも「よ」や「ね」が伝達上どのような貢献をしているのかと考えたときに、この説明では納得しがたいものがある。すなわち聞き手が知っている(あるいは知らない)ということ、わざわざ言語形式によって聞き手に示すことに、どのような意味があるのだろうか。「よ」や「ね」がなければ、聞き手は、提示される情報が自分の知っている情報かそうでないかの区別ができないのだろうか。そんなことはない。終助詞を除いた残りの部分からただちに判別できるからである。

2-2

次に挙げるのは、聞き手への働きかけということを中心にした考察、あるいは行為レベルでの考察とまとめることができるものである。ここでは「働きかけ」「持ちかけ」「確認を求める」「同意を求める」「同意を示す」「聞き手目当て」などの用語が用いられる。「よ」や「ね」は会話場面的に常に聞き手がいる所で使用されることに注目したアプローチであり、伝達上の機能ということが視野に入っている。その点では、筆者が2-1で挙げた3番目の問題点はここでは解消されている。以下では伊豆原(1993)と白川(1992)の分析を取り上げる。

伊豆原(1993)の場合：

文末使用だけでなく、語末、句末、さらに感動詞としての使用をも含めた統一的な説明が試みられているが、文末使用に関してそのコミュニケーション機能として挙げられているものを表にすると以下ようになる。

「ね」の機能	持ちかけ+共有化
	↓ +共有化+同意確認をする/求める ↓ +同意確認をする/求める
「よ」の機能	持ちかけ 持ちかけ+同意/不同意

「ね」と「よ」の大きな違いは、共有化の機能があるかないかである。2-1では、「ね」というのは聞き

手が知っている話し手が判断している情報ということであったが、伊豆原の場合は発話によってその情報を共有しようとするということになる。ただその際、共有化の例として「そうですね」とか「なるほどね」というのが挙げられているのを見ると、それが「そうです」「なるほど」の部分によるのか「ね」の部分によるのか判断が難しい。また、共有化の代わりに「聞き手との一体感」という語が用いられることもある。ところが、伊豆原が挙げている(5)の例を見ても、「ね」に共有化や一体感があり、「よ」にはそのような機能がないとはっきり言うことができるだろうか。山田さんであることを確認しているということは言えても、共有化、さらには一体化といわれると素直に賛同できない。「よ」に関しても、鈴木さんであることを教えてその情報を共有しようとしていると言えなくもない。

- (5) ーあの人山田さんですね
ー違いますよ。鈴木さんですよ。

また上の表を見る限り、「よ」には持ちかけという機能しかないことになる。これは、「聞き手に向けて話しかける」というような意味で用いられているようだが、そういう機能であれば、助詞を伴わない裸形式の発話にもあると言えるのではないか。その上この持ちかけ機能は「ね」にも共通しているのだから、「よ」独自の機能がない。一体「よ」とは何なのか。

さらにもう一つの問題点は、「よ」と「ね」を対話助詞と位置づけ、話し手の聞き手への伝達態度を表すとしながら、同意確認を求めるという態度と同意確認をするという、全く違った態度が同じ助詞によって表されるという不思議なことになっている。また「よ」の方でも「同意する」と「同意しない」という真反対のことが同じ助詞で表されるというのだろうか。いずれにしても説明原理が明確でない。混乱なしに外国人に教えられるとは思えない。

白川 (1992) の場合：

白川では「よ」と「ね」が対立的に取り上げられているのではなく、むしろ「よ」が見つ場合とつかない場合の対比から「よ」の機能を明らかにしようとするものである。考察の対象は主に述べた文だが、裸形式では独り言や一方的な言い渡しが多く、「聞き手目当て性を失っている^{注4}」という。命令文のように本来的に聞き手目当てな文では「よ」の付加は随意だが、述べ立て文や疑問文のように、必ずしも聞き手に向けたものであるということにはならない形の文では、聞き手目当て性をことさらに明示したい時に「よ」がつけら

れるのだという^{注5}。聞き手に対して、「あなたに向けて話しているのだ」ということを表す機能があるというのである。

ところが、白川 (1996) では疑問文に付加される「よ」を取り上げ、裸形式が相手から答を要求するものであるのに対し、「よ」のついた疑問文では必ずしも答を要求しておらず、既に話し手の方で答が分かっている場合に用いられるという^{注6}。

- (6) 君の給料で家が建てられるか？
(7) 君の給料で家が建てられるかよ？
(8) こんな本誰が買うか？
(9) こんな本誰が買うかよ？

白川 (1992) で「よ」はことさらに聞き手目当てであることを表明するとあったのと明らかに矛盾する。「よ」に関して、一方で相手からの応答を期待せず、聞き手に向けられるというよりは独り言や捨てぜりふのような(7)や(9)に用いられる助詞が、他方で聞き手目当てに用いられるものであるというもおかしなことであろう。

2-3

「よ」「ね」に関する研究の中で金水 (1993) はこれまでのものとは少し性格を異にする。当該の発話と文脈との関わり方を示すものという位置づけで、談話内の発話というレベルにまで考察対象を拡大させている。彼が「ね」に与えた意味は次のようなものである。

「ね」の意味：当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクせよ。^{注7}

その際、「マッチングとは、話し手が入手している仮説の集合のひとつと、当該の発話が含意する仮説の集合とから、等価な情報が引き出せるかどうかを計算すること^{注8}と定義している。そしてリンクとは「情報が等価であるとみなし、同一視すること^{注9}」であるという。必ずしも分かりやすいとは言えないが、彼がこの定義を導き出すために挙げている北野 (1992) の例を見よう。本来聞き手が知らない情報には「よ」がつかうと思われていた(2-1参照)のに、例えば(10)(11)のように明らかに聞き手が知らない情報に「ね」のつくことがある。

- (10) A：いま何時ですか
B：ええと、7時ですね
(11) A：勤めて何年目ですか
B：もう20年になりますね

北野は「ね」が自然に使えるのは、返事をするのに「何らかの検索や計算過程が必要な場合」であると言う。名前を聞かれて、「中村花子ですね」などとは言えないというのと対比させ、「態度決定のための計算過程が必要である」ような情報に関しては「ね」をつけることができるのだと説明している。そのことを金水は「「ね」は情報のマッチングに関与する」と言い、「時計の視覚的情報から時刻を読みとるのは特殊な計算を必要とし、……計算の結果、状況（時計の針が7と12のあたりを指しているということと言っていると思われる）と表現（「7時です」をさしていると思われる）が同一視できると話し手が判断した証として「ね」がついている^{註10}」のだという。すなわち、「中村花子である」という情報は、話し手にとって計算して算出しなければいけないものではないが、時間の方にはそれが必要だというのである。そうだろうか。このように計算過程が必要な情報を話し手が判断した証と共に提示する場面と言え、ただちに教室場面が思い起こされるが、先生に質問された生徒たちは「ね」を用いて答えることができるだろうか。「それは平行四辺形ですね」などと答えた生徒がいれば、どのような評価を受けるだろう。

また名前を答えるのに「中村花子ですね」はおかしいと言うが、おかしくない状況はすぐに思いつける。

⑫ A「あなたのお名前は？」

B「中村花子ですね」

たとえば、名字と名前をアルファベットにした時の字数がちょうど同じになる人は幸せな結婚ができるという全くばかげたことが話題になっているでしょう。有名人の結婚をいろいろ例示したあと、AがBに名前をきいたとする。その時Bは⑫のように答えることができるだろう。その際、決して北野、金水が言うように、自分の名前の字数を計算しているためではない。計算して判断した結果「中村花子ですよ」と答えることもできるからである。これについては5の「ね」のところでもう一度取り上げるつもりである。

金水は、「よ」や「ね」の定義において「マッチ」「リンク」「文脈」「関与的」「登録」などの用語を使い、これら助詞の機能を関連性理論との関わりにおいてとらえようとしているようである。しかし、文脈にマッチするというのを検索や計算と結びつけ、結果「ね」や「よ」がつく情報にはある特定の特徴があるという、これまでのものと大差のないものにしてしまったと言わざるをえない。その意味では、これまでの考察では常に文が孤立させられ、その言語形式に密着した扱わ

れ方であったとすることができるだろう。

3 関連性理論が考える伝達行為

これまでの研究がどれも、談話連鎖の中からその部分（終助詞を含む文）だけをとりだし、その文が表す情報内容の特徴と関連づけるものであったことは、ある意味では避けられないことであったのかもしれない。というのも、文が発話に、発話が談話へと単位が拡大されてはきたが、それらが伝達されるものであることが疑われたことはなかったからである。スベルベル/ウイルソン(1986)によると、「言語は伝達のためにあるのではなく、情報処理のためにある^{註11}」という。これが意味することは、言語表現は伝達されるべき事柄そのものに対応しているのではなく、むしろ伝達されるべき事柄に到達するための手がかりであるということである。これまでの語用論では、字義通りかそうでないかの別はあっても、言語表現は、話し手が聞き手の中に引き起こそうとしているある特定の思考を表していると考えられていた。しかしここでは、言語表現は単なる手がかりであり、話し手が聞き手の中に引き起こそうとしているのは、聞き手の認知環境を変えることであるとする。認知環境を変えられた聞き手は、自らの情報処理能力によってある結論を導き出す。それを関連性理論は次のように表す。すなわち、話し手が発話aをする。それを聞き手が受け取ると、聞き手の認知環境が変化する。認知環境の変化とは $a \rightarrow P$ （aならばPと読む）という想定が聞き手の中に生じることをいう。聞き手はその想定と発話からPなる結論を導き出す（aかつ $a \rightarrow P$ ならばP）。それが話し手の思惑通りであれば、話し手の選んだ発話aは聞き手に対する適切な手がかりであったということになる。ところが、聞き手の中に生じる想定は $a \rightarrow P$ とは限らない。 $a \rightarrow Q$ あるいは $a \rightarrow R$ であるかもしれない。その場合はQあるいはRが結論づけられる。それらが話し手の思惑と違っていれば、発話aは適切に選ばれたとは言えないことになる。関連性理論では、それだからといってコミュニケーションの失敗とは考えない。むしろそれが、日常的な常態という捉え方をしている。そういう中では、話し手はできる限り適切な手がかり（言語表現）を提供して、聞き手の導き出す結論をコントロールしようとする。その意味では、発話形式は、話し手によって選び抜かれたものであるはずである。おそらく「よ」や「ね」も例外ではなからうというのが筆者の考えるところである。まずは具体例から始めよう。

4 事例観察

(13)は筆者がある駅の構内で実際に聞いたやりとりである。母娘がプラットホームへ降りる階段に向かって歩いてきた時のこと、母親が階段に足をかけた途端、娘が声をかけた。

- (13) 娘：こっち行くの？
母：うん？
娘：中野で降りるんよ。

そして、娘は1人で反対側の階段を降りて行き、母親も後ろをついていった。娘は、駅によって改札口の位置が違っているから、中野で降りるには反対側の階段の方が都合がよいと思っているようだ。さて、問題は「中野で降りるんよ」の「よ」である。「ね」ではいけないのだろうか。「中野で降りるんね」としても、この場面であり得ない表現ではない。では、「よ」を使った時と「ね」を使った時とで、どのような違いがあるのだろうか。私たちも母娘になったつもりで考えてみよう。おそらく娘の頭には、次のような考えがあったであろう。今から行くのは中野である。中野ならあちらの階段が便利である。今これを次のように定式化しよう。

- $a \rightarrow P$ (=もしaならば、P)
但し $a =$ [中野で降りる]
 $P =$ [あちらの階段を取る]

さて、娘はPが実現されると思っていた。それなのに、母が-Pを実現した。母は「中野で降りるならばこちらの階段を取るべきだ ($a \rightarrow P$)」と勘違いしているのかもしれない。あるいは「中野で降りることなど考えていないから、こちらの階段を取った ($-a \rightarrow P$)」のかもしれない。このように、娘は母の行為から母の頭の中にある考え(関連性理論では「文脈仮定」と言う)を導き出し、それぞれから「母は中野へ行こうとしている」あるいは「母は中野へ行こうとしていない」を結論づけることができる。問題の娘の発話は、母の行為をこのように処理した上で実現されている。そうでなければ、会話は外的外れなものになってしまうだろう。今、娘は $-a \rightarrow P$ を選択したようである。「こっち行くの？」というのは、その後件部分を確認したもので「-Pが実現されているのか」ということを意味している。ところが母の応答が曖昧なので、今度は前件に焦点を当て、 $-a$ が偽であることを示す。それによって母は、 $-a$ でないならば-Pでない、すなわち $a \rightarrow P$ なる文脈仮定を導きだし、そこから結論「あちらの階段

を取るべきだ」を推論するだろうと娘は考えているのである。

一方、「ね」の方はどうであろう。「中野で降りる」のままにしておく、状況に変更を加えなければならぬので「中野で降りないんね」という形にしよう。この発言はイントネーションやアクセントの置き所によって、問いかけ、念押し、不平、場合によっては感嘆などの行為になりうるが、いずれにしても、この発話を処理するために母が導き出さねばならない文脈仮定は、 $-a \rightarrow P$ そのものである。 $-a$ が真であることの確からしさの違いが、上述のような行為の違いを作っている。不平や感嘆は $-a$ が真であることをほぼ確信した上での行為であり、念押しや問いかけはその確からしさが少し後退した時の行為である。しかし、確からしさに程度の違いはあっても、話し手が前提にしているのは、 $-a$ が真であるということである。すなわち、「中野で降りないのであれば、母はそのまま階段を降り進んでよい」というものである。もちろんそれは同時に、「中野で降りるのであればこの階段はいけない」を含意してはいるが。

さて、ここで「よ」と「ね」の場合について、当該発話から導き出されるべき文脈仮定とその直前の発話(ここでは母がこちらの階段を降りるという行為)から受け手(=当該発話の話し手)が導き出した文脈仮定を比べてみよう。

- 「中野で降りるんよ」の場合：
(直前発話から導き出された文脈仮定)
中野で降りない \rightarrow こちらの階段を取っていい
(当該発話から導き出されるべき文脈仮定)
中野で降りる \rightarrow あちらの階段を取るべきだ

- 「中野で降りないんね」の場合：
(直前発話から導き出された文脈仮定)
中野で降りない \rightarrow こちらの階段を取っていい
(当該発話から導き出されるべき文脈仮定)
中野で降りない \rightarrow こちらの階段を取っていい

「よ」と「ね」では二つの文脈仮定間の関係に違いがあるのが分かるだろう。「ね」では同一であり、「よ」では対立している。ここに、「よ」と「ね」の機能を解明する秘密があるのではないだろうか。発話は選ぶべき文脈仮定を決定するための手がかりであった。「よ」と「ね」も発話の一部である。「よ」は直前発話の文脈仮定と対立するものを、そして「ね」は直前発話の文脈仮定と同じものを選べというシグナルではないか。もう一度、当該発話から文脈仮定が選ばれる過程をよ

く見てみよう。当該発話は娘の発言である。そこから文脈仮定を作り出すのは、母である。母はどのようにして文脈仮定を作り出すのだろうか。前件は娘の発話内容そのものを代入するのだからいいとして、問題は後件部分である。もし、その時「後件は母自身の行為から娘が導いた文脈仮定と同一である」あるいは「対立する」というヒントが与えられるとすれば、それは後件選びに大いに助けになるだろう。たとえその文脈仮定が娘の頭の中にあるもので、母自身が考えているものではないとしてもである。なぜなら、我々人間には自分の行為が相手にどのような文脈仮定を作り出させるか、皆目見当がつかないわけではないからである。母には自分の行為が娘に引き起こしたと思われる文脈仮定の見当がついているのである。それとの関連性が指摘されるのだから、役に立たないはずがなからう。それへの同一シグナルが「ね」であり、対立シグナルが「よ」なのではないか。「同一シグナル」であれば「こちらの階段を取る」であり、「対立シグナル」であれば「こちらの階段を取らない」である。こうして母は導き出すべき文脈仮定を容易に探し当てることができるのではないか。

このように考えてくると、「よ」と「ね」は直前の相手発話から自分がどのような文脈仮定を導きだしたかを暗示し、それへの関係性ということを利用してことによって、自分の発話の文脈仮定を相手に導き出させる手がかりを提示するものであるということになる。これらの終助詞は「対話助詞」と呼ばれることがあるが、^{注12}対話というものが相手の言っていることを理解することと相手にこちらの言おうとしていることを理解させることから成り立っていることを考えれば、両方の手がかりを一語で表すこの助詞に、このような命名はまことに当を得たものであると言えよう。

5 「よ」「ね」の機能

以上、述べてきたことをまとめると、「よ」と「ね」の機能は次のように書き表すことができる。

「よ」の機能：

この発話から最適な文脈仮定を導き出しなさい。但しそれはあなたの直前の発話から私が導き出した文脈仮定に対立するものです。

「ね」の機能：

この発話から最適な文脈仮定を導き出しなさい。但しそれはあなたの直前の発話から私が導き出した文脈仮定に平行するものです。

この定義を支持する例を「よ」と「ね」に関してひとつづつ挙げよう。(14)は、小さな争いである。争いというのはおおむね反論、対立、否定から成り立っている。発話の度に「よ」が重ねられ、両者が相手との対立を明確にしていく例^{注13}である。

(14)一緒に歩いていたはずの松太郎がタクシー乗り場に並んでいる

母：「松太郎、そこはタクシー乗り場だよ^{注1}、バスはこっちこっち」

松：「あ、タクシーで帰るんだよ^{注2}」

母：「そんなつまらないことよしなよ^{注3}。ちゃんとバスが家の近くまで行くのに！」

松：「いいじゃねえか、たまに帰ってきたんだ。金のことなら心配すんない、ちゃんともってるんだから」

母：「だったらそのお金で妹や弟たちにお菓子でも買ってあげたらいいじゃないかっ」

松：「なんだよう^{注4}、もう人前で」

母：「だって、タクシー代ずいぶん値上がりしてるんだよ^{注5}」

客：「あの、乗らないでしたらお先に」

松：「誰が乗らないっていったよ^{注6}」

この例からも分かるように、「よ」と共に示される発話文の形は自由である。叙述文(1, 2, 5)であっても命令文(3)であっても疑問文(4, 6)であってもかまわない。文の形は、選ばれる文脈仮定に影響しない。「そんなつまらないことよしなよ」は「そんなつまらないことはよすべきだよ」でも「そんなつまらないことはよそうと思わないのかよ」でも同じである。文の形はここでは単に文体上の違いである。

上の「よ」の中には、話し手の縄張り情報(たとえば2)、あるいは聞き手の知らない情報(1や5)と言えるものもあるが、それは、対立的な文脈仮定を作ろうとするときには相手は知らない情報の方がそうでないものよりも効果的であることが多いからに過ぎない。相手が既にもっている情報は、これから否定しようとしている認識の根拠になっている場合が常だからである。

また叙述文に関しては、白川や伊豆原が「よ」には「聞き手目当て」や「持ちかけ」機能があると言っているが、相手の考えに対抗して自分の意見を述べるときには、特にそういう機能があると感ぜられるだろう。そして「よ」文が疑問文であるときには、「聞き手目当て」にならず、むしろ「相手からの返答を期待しない」^{注14}独り言や捨てぜりふに近くなるというのも、既存の文脈仮定に対立するものである以上、既に答は決まっているのである。例え疑問文の形をしようとして、答は

決してオープンではない。

⑭ はテレビの実況中継からとったものである。プロゴルフシニア選手権を映し出しながらの、アナウンサー(A)と解説者(C)のやりとりである。このような談話は、討論会などとは明らかに性格を異にする。発言者の認識に大きな違いがなく、お互いの主張によって相補いながら、一つの見方を視聴者に提供するという姿勢が見事に「ね」で表されている例^{注15}である。

⑮

A: ま、Cさん、プロゴルファーは <u>です</u> ね、いろんな条	C: はい。
A: 件で関わっていきますから、雨が降っても、	C: そう <u>です</u> ね。
A: 風が吹いても、いい天気でも、その自然と闘うとい	C: はい。
A: うのも、これまた、ゴルフの、一つの 条件であり	C: そう <u>なん</u> です <u>ね</u> 。
A: ますもの <u>ね</u> 。	C: ま、これだけ大きなギャラリーの人が来て
A: ええ。 ええ。	C: いますから <u>ね</u> え。雨の中でどのようなプレーを <u>ね</u> 。
A: はい。	C: どういう技術を出すか <u>って</u> ことが <u>ね</u> 、プロのやっば
A: で、中には悪条件の中で	C: り見せるところ <u>で</u> し <u>ょう</u> <u>ね</u> え。
A: 強い選手 <u>って</u> いうのもいるわけ <u>です</u> よ <u>ね</u> 。	C: そう <u>です</u> よ <u>ね</u> 。

「ね」をこのように解釈すると、「計算を要する情報とそうでない情報^{注16}」という苦しい説明もせずすむ。

計算の不要な情報で「ね」がつかないとされた例：

- ⑯ A 「あなたのお名前は？」
B 「中村花子ですね」

談話全体の中からこの部分だけを取り出すと、おかしく思えるかもしれないが、先に挙げたように、名前のアルファベットから将来の占いをしている場面だとしよう。Aが姓と名の字数が同じであれば幸せな結婚ができると言って、色々実例を出し、その正しさを主張した後、Bに名前をきいたとしよう。Bは「よ」で

も「ね」でも答えることができる。しかし「よ」がつくと「幸せな結婚がしたいのに、困りますよ、そんな占い」という不満、あるいは「既に幸せな結婚をしている私の例を当てはめると、あなたの占いは当たっていない」という反論に近くなる。ところが「ね」が使われると、「ああよかった、では私は幸せな結婚ができる」とか「ああ、それでは私は一生幸せな結婚には縁がないのか」ということになり、いずれにしてもAの占いを肯定することになる。すなわち「ね」文の発話からでてくる仮定「中村花子であるならば字数は同じではない。字数が同じでなければ幸せな結婚はできない」が、直前の文脈仮定「字数が同じであれば幸せな結婚ができる(=字数が同じでなければ幸せな結婚はできない)」と重なるのである。時間や勤務年数など計算の必要な情報を答える場合に限り「ね」がつくというのは正しくない。これらの場合も前後の脈絡なしにいきなりこのようなことをきかれたり答えたりするのではなく、その情報を当てはめれば同じ結論がでてくるような文脈仮定がそれ以前にあるはずである。そしてそのような文脈仮定に対立することも可能なわけだから、これらの情報が「よ」と共に示されることがあるのは言うまでもない。

ところで、「ね」には直前に発話がなく、当該発話の文脈仮定をそれと対応させることができないものがある。そして日常会話で見られる「ね」の多くはこれなのである。例えば「暑いですね」や、「あら、髪きったのね」といった場合の「ね」である。一見これまでとは同様に扱えないように思えるかもしれないが、ここで提出しようと思う説明はこうである。話し手は当該の発話がどのような文脈仮定内で解釈されるべきかについて「聞き手が直前にもっていると思われる文脈仮定と同じ文脈仮定である」ということを示すだけで、実際は話し手自身は聞き手も持っているだろう文脈仮定がどのようなものかについては全く知らない。それどころかもっているかどうかとも知らない。知らないのに、あなたと同じですという態度なのである。聞き手の方も「同じである」というシグナルを与えられても、もっていなければ対応させることはできない。例えもっていたとしても、それを相手が知っているはずがないことが分かっているれば、「同じだ」と保証されてもはなはだおぼつかない。結局この種のやりとりでは正直に文脈仮定を呼び出し、そこから何か結論を導くことなど端から考えられていない。発話表現は共感や共通認識をもっていること自体を示すために利用されただけであり、対話者間に連帯感を作り出すことが一義的なのである。「文脈仮定が同じである」という「ね」の機能を利用した戦術である。

6 「よね」について

最後に「よね」について一言つけ加えておこう。「よ」と「ね」の機能を互いに排他的に説明すると「よね」の場合に困ったことになってしまうという指摘がある。これまでの説明では確かにそうであった。しかし、私たちの説明枠ではこの指摘は当たらない。私たちの説明も「二つの文脈仮定が平行か対立か」というのだから、明らかに排他的である。ところが、それが「よね」に対して矛盾したことにはならないのである。

「よね」は、会話者が3人以上いる場面を考えれば最も分かりやすい。まず1人の相手に対して対立する文脈仮定を「よ」で提示し、その対立的文脈仮定を出すこと自体がもう1人の相手の文脈仮定に平行していることを「ね」で示すのである。「よね」は別々の文脈仮定をもっている二人の相手に対して同時に自らの態度を表明していると言える。とはいえ、当座の聞き手は「ね」が向けられる相手である。すなわち並行的文脈仮定を有している方の相手である。

(16) 浮輪をもった近所の子(A)に出会う。

B「あら、泳ぎに行ってきたの?」

C「今から行くのよね」

Bは、Aが浮輪をもっているという視覚情報から「浮輪をもっているならば泳ぎに行ってきた」という文脈仮定を導き出すが、Cは「浮輪をもっているならば泳ぎに行く」という文脈仮定を導き出す。そしてそれがA自身の文脈仮定であろうとも思っている。とすれば、AはBとは対立する文脈仮定をもっているはずであり、もしAがそれを言語化するとすれば「今から行くのよ」になるはずである。その部分をCがAに代わっておこなっているとも言えるが、まさにそのために、今度はその発話全体がAの文脈仮定内で解釈されるよう、「ね」が必要なのである。

対話者が二人だけの場合も、「よね」が用いられている箇所を見ると必ずその話題の中に第3者が登場し、上で述べたような3者関係が成立している。もちろん発話の聞き手は、目の前にいる相手である。

(17) 「学部長が……何もかも犠牲にしてから研究にもうとにかくうちまにゃいけんって言いよったじゃん。私、もうとんでもないと思ったんよね」

(18) 腰に鍵だの鎖だのをじゃらじゃらつけている子(A)がいることを話題にして

B:「邪魔にならんのかなあ」

C:「貧弱な奴には似合わんよね」

(17)では、学部長の考えには反対する。そして学部長に反対であることは、目の前の相手の考えと同じであるということである。(18)では、Cはそのような格好が似合うと思っているAの考えに反論し、そしてその反論自体はBと共有するものであるという意味である。

7 まとめ

「よ」と「ね」は、これまで考えられてきたように、話題の特徴をマークするものでもなく、また伝達上の機能を持つものでもなく、認知環境の把握に貢献しているものであることを示したつもりである。そこには、発話は伝達されるべき事柄そのものではなく、そこに到達するための手がかりであるという関連性理論の考え方が根底にある。それに従えば、発話を構成しているすべての形式は常に何らかの手がかりになっているはずであり、その点では「よ」「ね」も例外ではない。言葉による相互理解が、発話という手がかりを提供することによって、聞き手に新たな認知環境を作らせ、その中で聞き手自身に新たな認識をさせるというイメージでとらえられている中では、「よ」も「ね」も新たな認知環境(文脈仮定と呼んできたもの)を呼び出すために機能しているはずである。「よ」「ね」は認知環境の内容的な事柄に関わることはない。それはむしろ「よ」「ね」を除いた発話部分の貢献が大きい。「よ」「ね」は新しい認知環境がそれ以前の認知環境と対立、あるいは平行していることを示すだけである。もちろんそれが内容の決定を大いに助けるものであることは言うまでもない。会話がスムーズに運ぶのは、発話間に結束性があるのではない。発話によって引き出される文脈仮定の結束性によるのである。その連鎖が対立か平行かを明示するのであるから、「よ」と「ね」は会話の進行係のようなものと言わなければならない。色々な意見をとにかく賛成か反対かのいずれかにまとめていくのに似ているからである。ここでは、文末で用いられているものに限定してきたが、語末や単独での使用をどう考えればいいのか、また日本語に固有のような扱いを受けることがあるが、他の言語では何かがその代わりをしているのか、またこれらの頻繁な使用が談話の展開にどのような影響、効果を及ぼしているのか、今後に残された課題である。

注

1) 大曾93ページ参照

- 2) 大曾93ページ参照
- 3) 北野浩明 (1992) による「日本語の終助詞「ね」をめぐる諸問題」京都大学言語学懇話会発表資料での指摘であることが金水に紹介されている。
- 4) 白川 (1992) 42ページ
- 5) 白川 (1992) 42ページ以下参照
- 6) 白川 (1996) 10ページに掲載の例
- 7) 金水120ページ
- 8) 金水119ページ
- 9) 金水120ページ
- 10) 金水120ページ
- 11) スペルベル／ウイルソン (邦訳) 209ページ
- 12) 伊豆原103ページ参照
- 13) ちばてつや「のたり松太郎4」小学館より
- 14) 白川 (1996) 12ページ
- 15) 1995年6月3日放映の「'95日本プロゴルフシニア選手権」より。広島大学大学院生松浦和美さんの転写による。
- 16) 北野 (1992) 参照

参考文献

陳常好(1987)：「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャッ

- プを埋めるための文接辞」『日本語学』第6巻第10号 93-109.
- 伊豆原英子(1993)：「「ね」と「よ」再考—「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育』80号 103-114.
- 神尾昭雄(1990)：『情報の縄張り理論—言語の機能的分析』大修館書店
- 金水敏(1993)：「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』22巻4号 118-121.
- 大曾美恵子(1986)：「誤用分析1「今日はいい天気ですね」—「はいそうです」」『日本語学』第5巻第9号 91-94.
- 白川博之(1992)：「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77号 36-48.
- 白川博之(1996)：「「働きかけ」「問いかけ」の文と終助詞「よ」」『広島大学日本語教育学科紀要』第6号 7-14.
- Sperber, Dan / Deirdre, Wilson (1986) : *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell. 内田聖二, 中邊俊明, 宋南先, 田中圭子訳 (1993)『関連性理論—伝達と認知』研究社
- 上野田鶴子(1972)：「終助詞とその周辺」『日本語教育』17号 62-77.

